

初めてのマクロセミナー



Femtet

Computer Aided Engineering System
Murata Software Co., Ltd.

13 : 30 – 16 : 00

講師 伊勢 智之 @ムラタソフトウェア

	Page
1. はじめに	1
2. マクロを使用するための準備	8
3. Femtetからマクロコードを出力し動作確認	11
4. マクロコードの構成を理解する	24
5. データベース設定を変更する	42
6. モデルの寸法を変更する	53
7. メッシュサイズを変更し解析実行する	60
8. 解析結果の抽出内容を変更する	63

適当なタイミングで
休憩をはさみます

【対象者】

当セミナーはVBAでのプログラム経験がない、Femtetのマクロ機能を使ったことがない、マクロ機能を使ったことはあるが、コードの内容がよくわからずカスタマイズすることができないといった方向けのセミナーです。

【セミナーの目標】

- ・Femtetのマクロ出力機能で出力されたコードの処理の流れをおおまかに理解する。
- ・実際にコードを変更してマクロを実行し動作確認を経て、マクロ編集のコツをつかむ。

1.はじめに

【マクロ機能を使うメリット】

メリット 1 複雑なモデル作成の自動化

メリット 2 解析結果分析の効率化

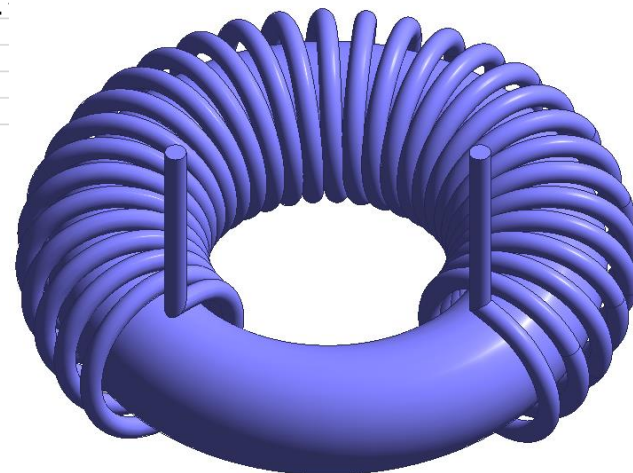
メリット 3 C A E の普及、活用促進

メリット1 複雑なモデル作成の自動化

Femtetのモデル画面上からでは作成が困難なモデルや、手間のかかるモデルを自動で作成

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
1	プロジェクト名	C:\temp\%troic(プロジェクトを保存するパスを入力します)								
2	トロイダルの小半径	4								
3	トロイダルの大半径	10								
4	トラスの小半径	3								
5	コイルの巻数	20								
6	コイルの半径	0.5								
7	引出し線の長さ	10								
8	巻き終わり角度	270 (コイルの巻き始めの位置を0度として、巻き終わりの位置を角度で指定します。)								
9	コイルの多角柱化	1 (多角柱化する事で巻き数が多い場合のメッシュ生成エラーを回避します。)								
10										
11										
12										
13										

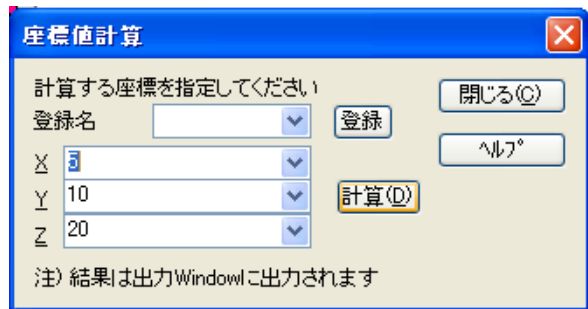
実行



ムラタソフトウェアウェブサイトサンプルマクロページの事例2から
こちらのマクロをダウンロード可能。

<https://www.muratasoftware.com/support/macro/>

手間のかかる計算結果の取り出しを自動実行



取り出したい座標が多数ある場合、
データの取り出しが大変

マクロを使えばまとめてデータ取り出しが可能！

結果ファイル名(C:\temp\ex1.pdt)						
位置 座標X[mm]	位置 座標Y[mm]	位置 座標Z[mm]	計算実行	磁束密度 Bx	磁束密度 By	磁束密度 Bz
-10	-10	0				
-10	-5	0				
-10	0	0				
-10	5	0				
-10	10	0				
-5	-10	0				
-5	-5	0				
-5	0	0				
-5	5	0				
-5	10	0				
0	-10	0				
0	-5	0				

メリット3 CAEの普及、活用促進

開発部門

マクロで独自の解析システムを構築

(解析技術開発・要素開発)



設計部門へ展開

Femtetを使ったことのないユーザーも
CAEの恩恵が受けられる

The screenshot shows a workflow starting with an Excel spreadsheet titled "Microsoft Excel - CAMPUS2ステップ解析.xls". The spreadsheet contains a table of parameters for a toroidal core analysis, including wire diameter, coil pitch, and air gap. A "計算開始" (Start Calculation) button is visible. Below the table, a diagram of a toroidal core is shown with a mesh and coordinate axes (X, Y, Z). The diagram is labeled with "7ターンモデル" (7-turn model) and "外径: 8.8mm" (outer diameter: 8.8mm), "内径: 7.8mm" (inner diameter: 7.8mm). The diagram also shows a "コア" (core) and "巻線" (winding) section.

データ入力	値	単位	備考
ワイヤ径	40	mm	
巻線ピッチ	0.26	mm	
コイルピッチ間隔	0.200	mm	
リッド外径	15.510	mm	
リッド内径	7.7467	mm	
リッド厚み	0.9373	mm	
空気層X径	30	mm	
空気層Z径	10	mm	

φフレイトコアの作図(平面円→Z軸引き伸ばし→プリアン素)	X	Y	Z	半径	Z軸引き伸ばし
外円	0	0	-0.468867	7.7550	0.937
内円	0	0	-0.468867	3.8733	0.937

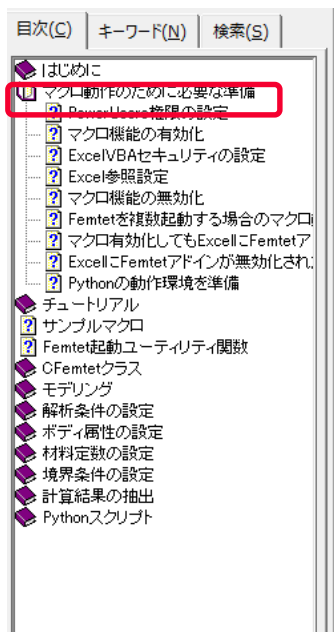
φ空気層の作図(立方体)	X	Y	Z	幅(X)	高さ(Y)	奥行長(Z)
立方体	-15	-15	-5	30	30	10

2. マクロを使用するための準備

マクロを使用するための準備事項についてご説明します。

2. マクロを使用するための準備

マクロ機能を使用するにはいくつか事前準備が必要です。
Femtetマクロヘルプの以下の項目を確認し、準備を完了してください。
「マクロ動作のために必要な準備」



マクロ動作のために必要な準備

マクロを動作させるには以下の準備作業が必要です。

手順

それぞれの詳細な手順はリンク先をご覧ください。

手順	設定が必要なタイミング	設定可能ユーザ
1. PowerUsers権限の設定	1台のPCで初回の1回だけ	管理者(Administrator)権限を持つユーザ
2. マクロ機能の有効化	1台のPCで初回の1回だけ Femtetを再インストールした際、Officeのバージョンアップを行った際は、再度設定要	PowerUsers権限を持つユーザ(手順1で設定) Windows Vista / 7 の場合のみ、管理者(Administrator)権限を持つユーザ
3. ExcelVBAセキュリティの設定	各ログインユーザ毎	全ユーザ
4. Excel参照設定	Excelのファイル毎	全ユーザ

※参照設定だけはエクセルファイルごとに必要

2. マクロを使用するための準備

【準備が不十分の場合のエラー例】

Option Explicit

```
Dim FEMTET As New CFemtet
Dim Als As CAnalysis
Dim BodyAttr As CBodyAttribute
Dim Bnd As CBoundary
Dim Mtl As CM
Dim Gaudi As CGaudi
Dim Gogh As CGogh
```

有効化設定を未実施の場合

Microsoft Visual Basic

実行時エラー 'g':
インデックスが有効範囲にありません。

下記の四つの変数はCGaudiクラスMulti***を使用する場合に用います。
例えばMultiFilletを使用する場合に引数であるVertex(点)は指定せず
複数のEdge(線)だけをFilletする場合にnullVertex()を用います。
「Gaudi.MultiFillet nullVertex,Edge」とすれば
複数のEdgeだけFilletすることができます。

Global nullVertex() As CGaudiVertex
Global nullEdge() As CGaudiEdge
Global nullFace() As CGaudiFace
Global nullBody() As CGaudiBody

変数の宣言
Private pi As Double
Private c_pi As Double

Main関数
Sub FemtetMain()
Femtet自動起動 (不要な場合Excelで実行しない場合はFilletをコメントアウト)
Workbooks("FemtetRef.xls").Activate: Femtet.Femtet

継続(C) 終了(E) デバッグ(D) ヘルプ(H)

Dim Gaudi As CGaudi
Dim Gogh As CGogh

参照設定を未実施の場合

Global nullVertex() As CGaudiVertex
Global nullEdge() As CGaudiEdge
Global nullFace() As CGaudiFace
Global nullBody() As CGaudiBody

変数の宣言
Private pi As Double
Private c_pi As Double

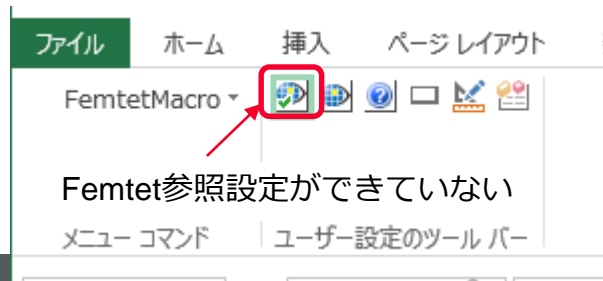
Main関数
Sub FemtetMain()
Femtet自動起動 (不要な場合Excelで実行しない場合はFilletをコメントアウト)
Workbooks("FemtetRef.xls").Activate: Femtet.Femtet

コンパイルエラー:
ユーザ定義型は定義されていません。

OK ヘルプ

2. マクロ機能の有効化

マクロ機能の有効化ができていない
⇒ マクロヘルプの「マクロ動作のために必要な準備」を確認



Femtet参照設定ができていない

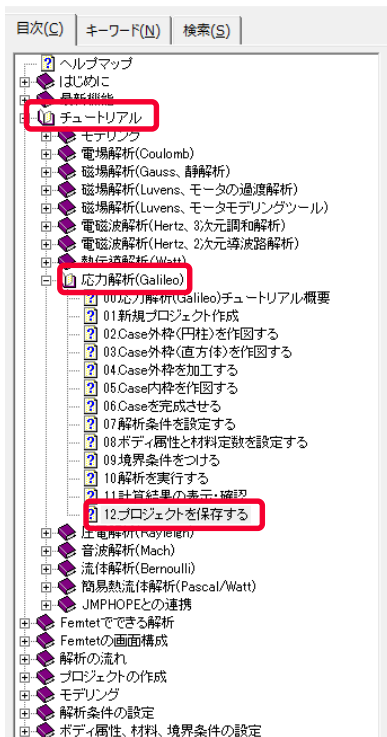
メニュー コマンド ユーザー設定のツール バー

ではさっそくFemtetからマクロコードを出力し、Excelで読み込んで動作させてみましょう。

- 3-1 プロジェクトファイルの取得
- 3-2 プロジェクトの動作確認
- 3-3 マクロファイルの出力
- 3-4 エクセルにマクロファイルを読み込む
- 3-5 マクロコードの確認
- 3-6 マクロを実行する
- 3-7 エラーが出た場合の対処
- 3-8.マクロ実行用ボタンの作成

3-1 プロジェクトファイルの取得

Femtetヘルプのチュートリアルからプロジェクトをダウンロードします。



00 01 02 03 04 05 06 07 08 09 10 11 12

12.プロジェクトを保存する

手順

- 最後にプロジェクトを保存します。

[アプリケーション]メニュー から、[名前を付けて保存] をクリックします。

- プロジェクトを保存するとモデル形状と解析結果が保存されます。

- [名前を付けて保存]ダイアログにファイル名を入力し、保存します。

- 次回、Femtetを起動し、

[アプリケーション]メニュー から、[開く] をクリックすると、モデルや解析結果を見ることができます。

- 今までのモデリング作業をマクロファイルに出力することができます。

[アプリケーション]メニュー から、[マクロファイルに出力] を行うと、Visual Basic、Excel VBAで使用できる、BAS形式のファイルにマクロが出力されます。マクロを使用することで、モデリング作業の効率化を図られます。マクロについての詳細は、マクロヘルプをご覧ください。

お疲れ様でした。これで、応力解析のチュートリアルは終了です。

- プロジェクトファイルを取得(保存してから開いてください。)

- この他にも解析事例を用意していますので「例題一覧(応力解析)」を参照してください。

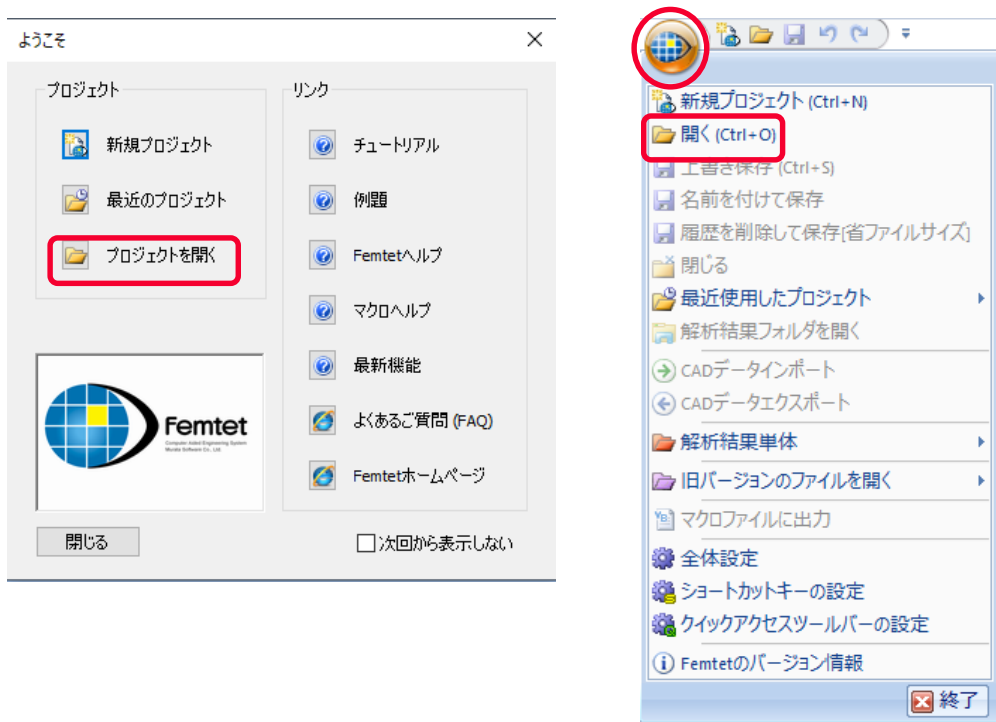
チュートリアル⇒応力解析(Galileo)⇒
12.プロジェクトを保存する のページを開く

「取得」のリンク部分をクリックし、
プロジェクトファイルを保存する



3-2 プロジェクトの動作確認

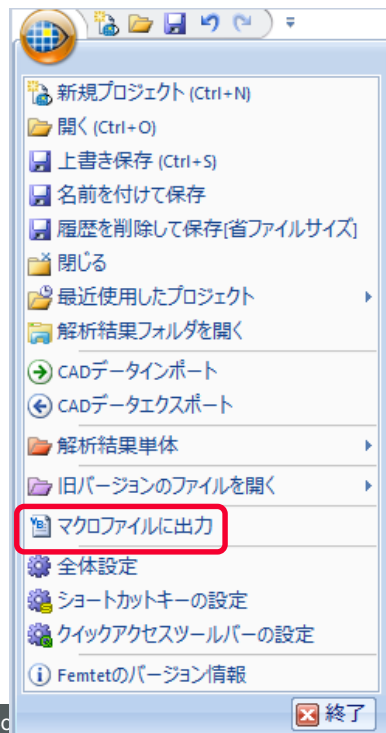
ダウンロードしたプロジェクトをFemtetで開きます。



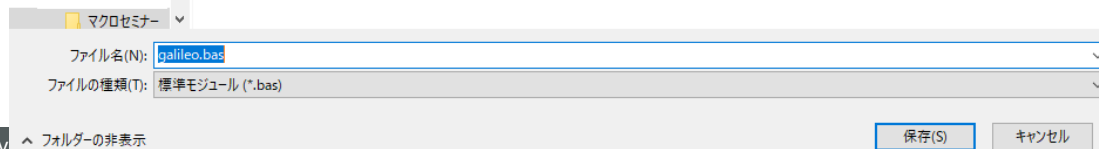
ようこそ画面の「プロジェクトを開く」または、アプリケーションボタン⇒「開く」メニューを実行し、ダウンロードしたプロジェクトを開く。

3-3 マクロファイルの出力

アプリケーションボタン⇒「マクロファイルに出力」を実行します。
モデル作成⇒条件設定⇒解析実行⇒結果抽出までのコードが生成されます。

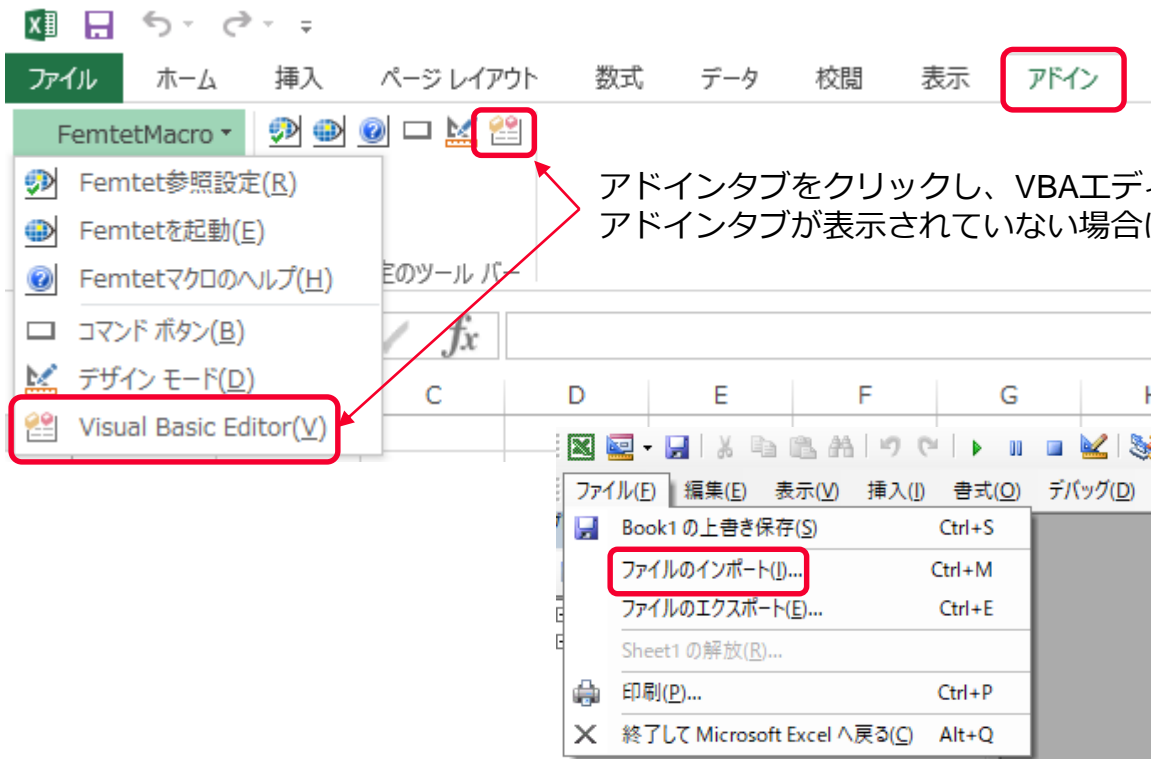


マクロファイル（拡張子.bas）を任意の場所に保存する



3-4 エクセルにマクロファイルを読み込む

Excelを起動し、エディタ（VBE）を開いてマクロファイルを読み込みます。

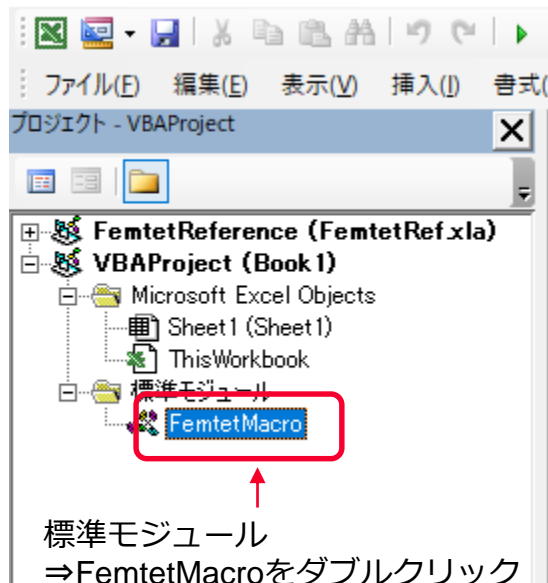


アドインタブをクリックし、VBAエディタを起動
アドインタブが表示されていない場合はマクロの準備ができていない可能性がある。

エディタ（VBE）が起動したら、
ファイルのインポートメニューを実行し
保存したマクロファイルをインポートする。

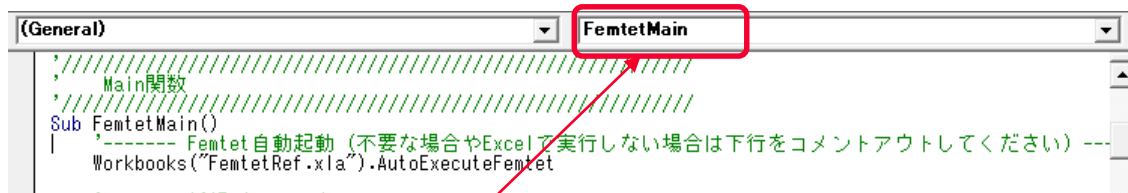
3-5 マクロコードの確認

インポートしたマクロコードを確認します。

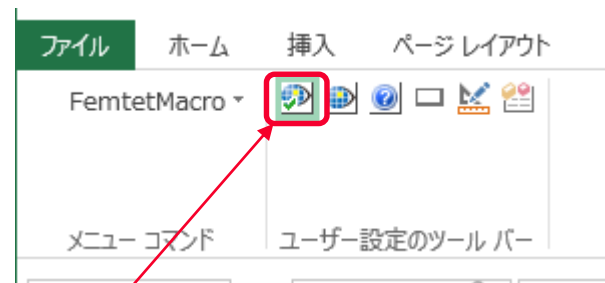


3-6 マクロを実行する

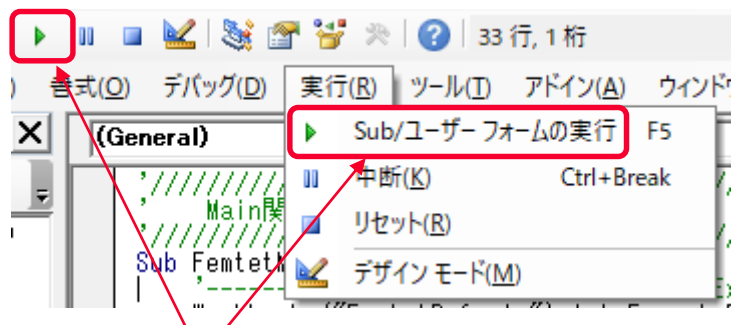
マクロを実行してみます。



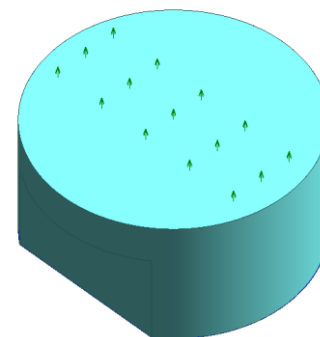
プロシージャのプルダウンメニューからFemtetMainを選択
⇒FemtetMain関数のコードに移動する



Excelのアドインタブ⇒Femtet参照設定を有効にする



「実行」タブ⇒「Sub/ユーザーフォームの実行」をクリック



モデルが自動生成される

3-7 エラーが出た場合の対処

【マクロ実行時にエラーが出た場合】

Option Explicit

```
Dim FEMTET As New CFemtet
Dim Als As CAnalysis
Dim BodyAttr As CBodyAttribute
Dim Bnd As CBoundary
Dim Mtl As CM
Dim Gaudi As CGaudi
Dim Gogh As CGogh
```

有効化設定を未実施の場合

実行時エラー'g':
インデックスが有効範囲にありません。

Microsoft Visual Basic

下記の四つの変数はCGaudiクラスMulti***を使用する場合に用います。
例えばMultiFilletを使用する場合に引数であるVertex(点)は指定せず
複数のEdge(線)だけをFilletする場合にnullVertex()を用います。
「Gaudi.MultiFillet nullVertex,Edge」とすれば
複数のEdgeだけFilletすることができます。

Global nullVertex() As CGaudiVertex
Global nullEdge() As CGaudiEdge
Global nullFace() As CGaudiFace
Global nullBody() As CGaudiBody

変数の宣言
Private pi As Double
Private c_pi As Double

Main関数
Sub FemtetMain()
Femtet自動起動 (不要な場合やExcelで実行のない場合はFemtetをコマンドプロンプト
Workbooks("FemtetRef.xls").Activate:EndSub

変数の宣言
Private pi As Double

Buttons: 継続(C), 終了(E), デバッグ(D), ヘルプ(H)

参照設定を未実施の場合

```
Dim Gaudi As CGaudi
Dim Gogh As CGogh
```

Global nullVertex() As CGaudiVertex
Global nullEdge() As CGaudiEdge
Global nullFace() As CGaudiFace
Global nullBody() As CGaudiBody

変数の宣言
Private pi As Double
Private c_pi As Double

Main関数
Sub FemtetMain()
Femtet自動起動 (不要な場合やExcelで実行のない場合はFemtetをコマンドプロンプト
Workbooks("FemtetRef.xls").Activate:EndSub

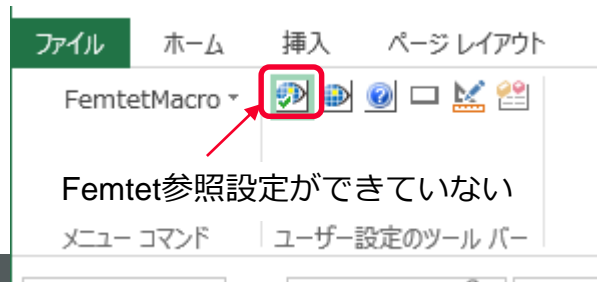
変数の宣言
Private pi As Double

コンパイルエラー:
ユーザ定義型は定義されていません。

Buttons: OK, ヘルプ

2. マクロ機能の有効化

マクロ機能の有効化ができていない
⇒ マクロヘルプの「マクロ動作のために必要な準備」を確認

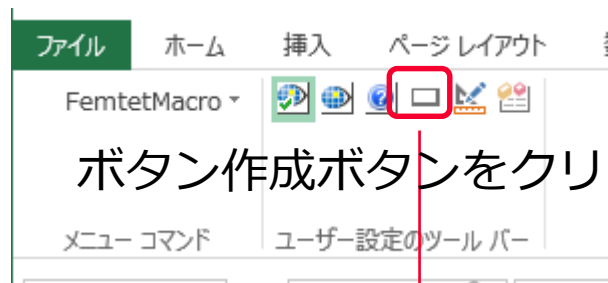


Femtet参照設定ができていない

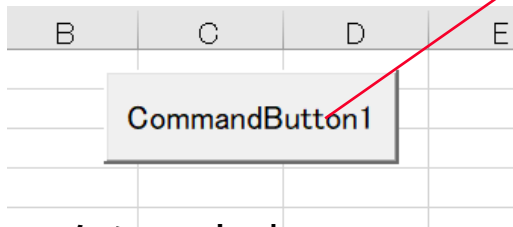
メニュー コマンド | ユーザー設定のツール バー

3-8. マクロ実行用ボタンの作成

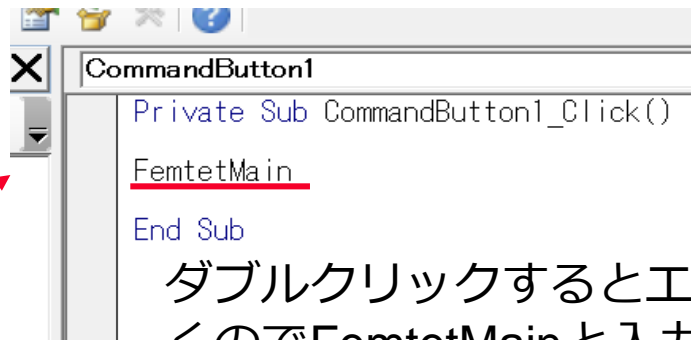
FemtetMain関数をボタンを押して実行できるようにします。



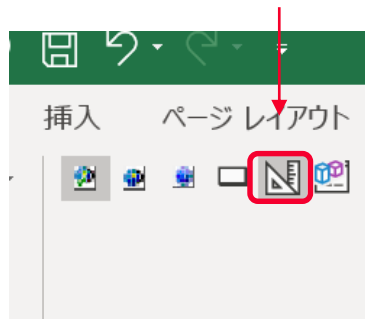
ボタン作成ボタンをクリック



ワークシート上の
適切な場所にボタンを作成
(マウスでドラッグ)



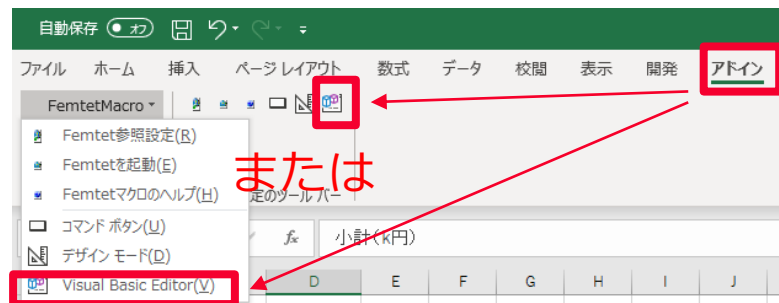
ダブルクリックするとエディターが開くのでFemtetMainと入力



デザインモードボタンをクリックしてデザインモードから抜け、ボタンを押すとマクロが実行されることを確認します。

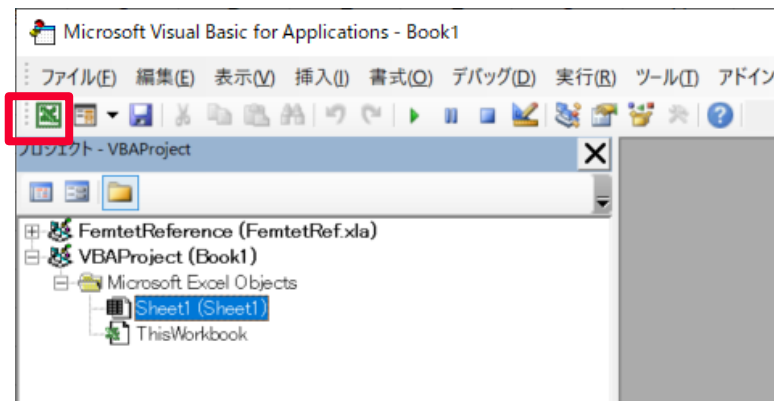
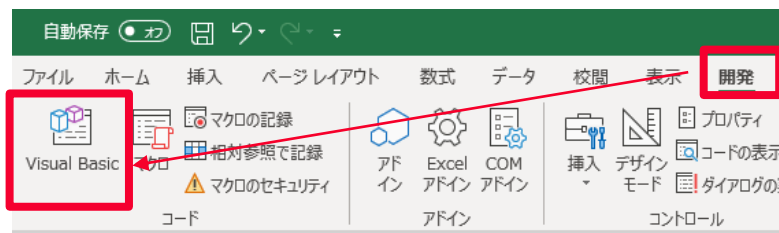
【補足】VBEとエクセルの画面切り替え

エクセル画面とVBE画面は簡単に切り替えることができます



または

または



エクセルからVBEを開く

VBEからエクセルに切り替える

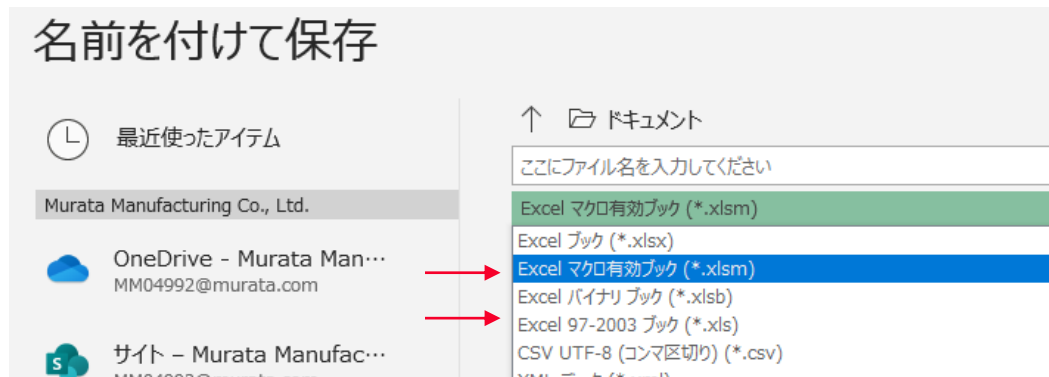
マクロコードを含むエクセルファイルの拡張子は以下のいずれかにします

○○○.xls

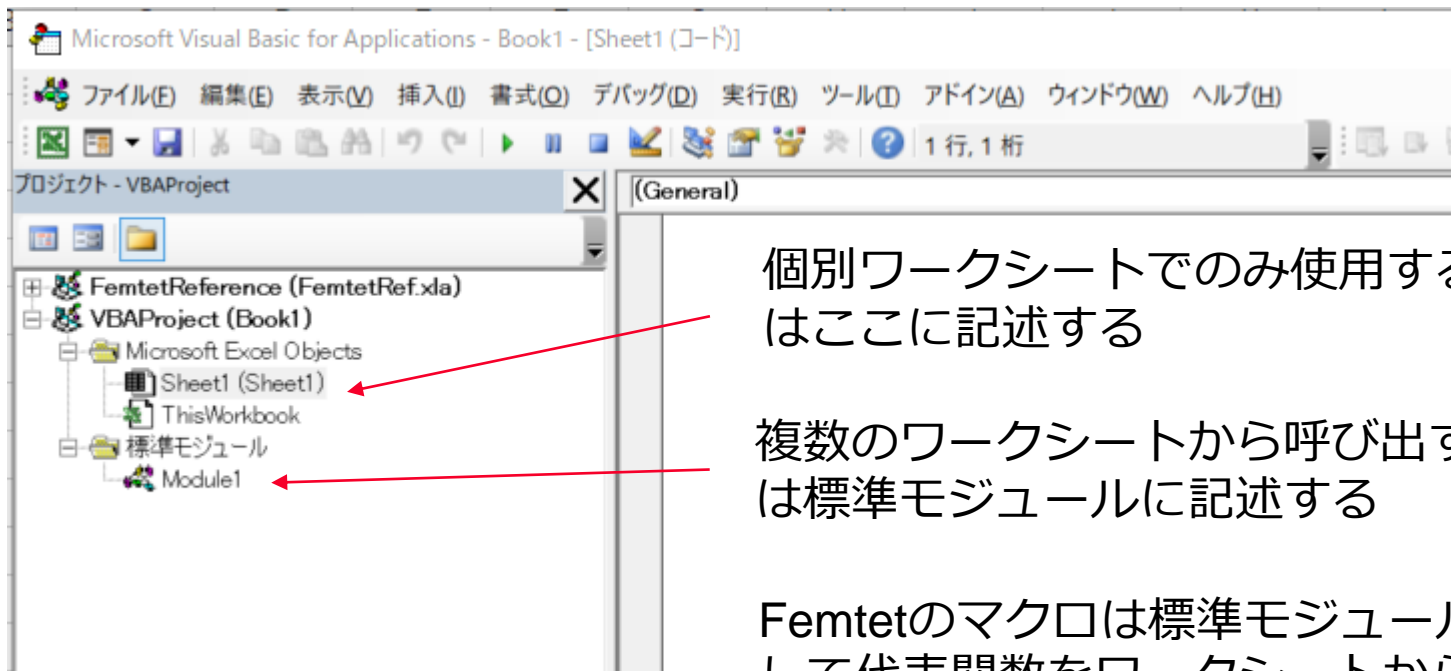
○○○.xlsm

※ ○○○.xlsxではマクロを保存できません。

新規にエクセルファイルを作成し、マクロをインポートし編集した後に名前を付けて保存する時の拡張子を*.xlsmまたは*.xlsとします。



各ワークシートまたは標準モジュールにコード（プログラム）を記述できる

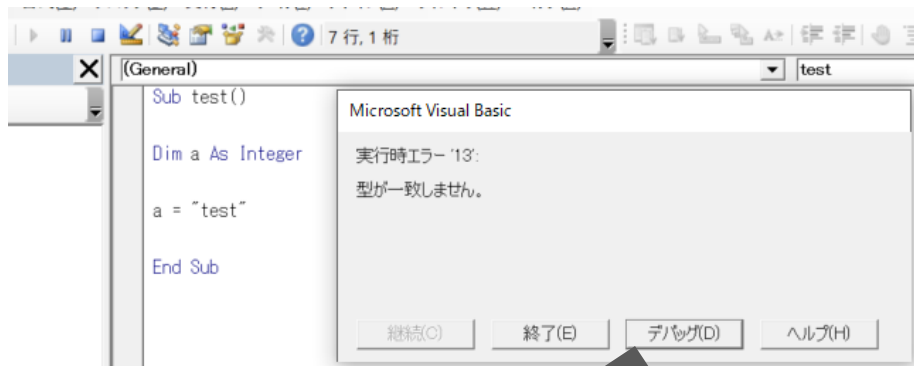


個別ワークシートでのみ使用するマクロ
はここに記述する

複数のワークシートから呼び出す共通関数
は標準モジュールに記述する

Femtetのマクロは標準モジュールにインポート
して代表関数をワークシートから呼び出すこと
ができる

【補足】エラーとなった場合の対応

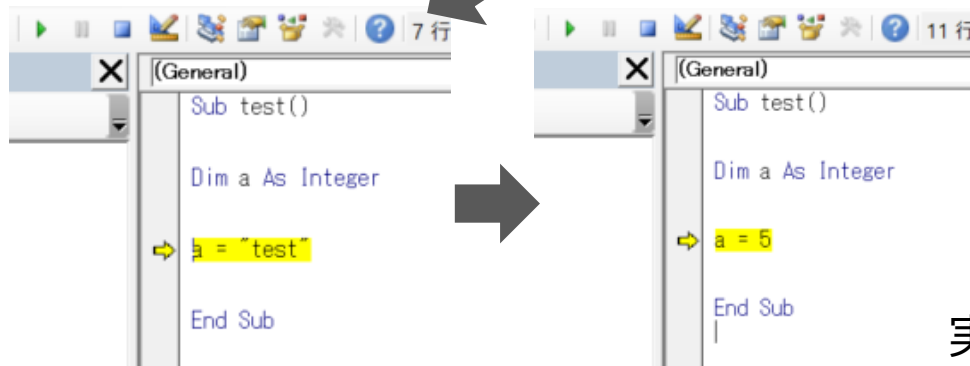


コードに不備がありエラーとなった場合、

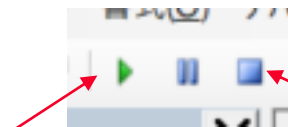
デバッグボタンを押すとエラー箇所が黄色で表示される。

修正して処理を継続する場合は継続ボタンを押す。

初めから処理をやりなおす場合はリセットを押して実行ボタンを押す



実行/継続

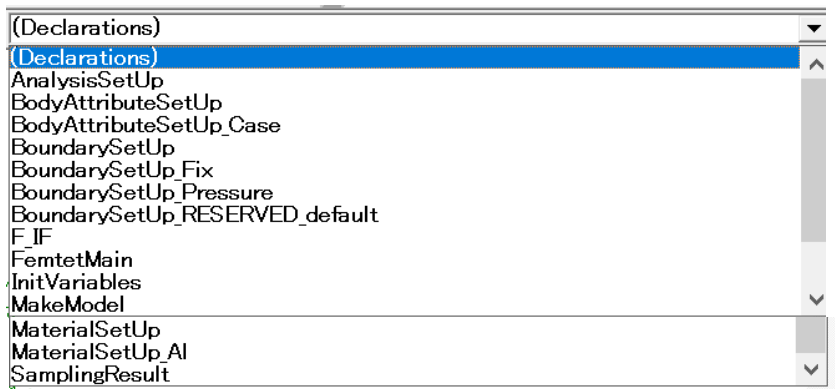


リセット

- 4-1 プロシージャラー（関数）のリスト
- 4-2 メイン関数の流れ
- 4-3 データベースの設定
- 4-4 モデル作成関数
- 4-5 結果取得関数
- 4-6 結果取得までマクロ実行する

4-1 プロシージャーのリスト

VBE (VisualBasicEditor)のプロシージャープルダウンメニューの▼ボタンをクリックすると以下のようなプロシージャーのリストが見れます。



※順番はアルファベット順ですが、記述の順番は異なります。

それぞれのプロシージャー（関数）の名前から処理内容が予想できます

FemtetMain	メイン関数
AnalysisSetUp	解析条件設定
BodyAttributeSetUp	ボディ属性設定
BoundarySetUp	境界条件設定
MaterialSetUp	材料定数設定
MakeModel	モデル作成
SamplingResult	結果取得

4-2 メイン関数の流れ

```
.;////////////////////////////////////  
; Main関数  
;////////////////////////////////////  
Sub FemtetMain()  
;----- Femtet自動起動 (不要な場合やExcelで実行しない場合は下行をコメントアウトしてください) -----  
Workbooks("FemtetRef.xlsx").AutoExecuteFemtet  
  
;----- 新規プロジェクト -----  
If FEMTET.OpenNewProject() = False Then  
    FEMTET.ShowLastError  
End If  
  
;----- 変数の定義 -----  
InitVariables  
  
;----- データベースの設定 -----  
AnalysisSetUp  
BodyAttributeSetUp  
MaterialSetUp  
BoundarySetUp  
  
;----- モデルの作成 -----  
Set Gaudi = FEMTET.Gaudi  
MakeModel  
  
;----- 標準メッシュサイズの設定 -----  
<<<<<<< 自動計算に設定する場合は-1を設定してください >>>>>>>  
Gaudi.MeshSize = 2#  
  
;----- プロジェクトの保存 -----  
Dim ProjectFilePath As String  
ProjectFilePath = "C:\Users\%MM04992\Desktop\%SWCセミナー¥はじめてのマクロセミナー¥galileo"  
<<<<<<< プロジェクトを保存する場合は以下のコメントを外してください >>>>>>>  
<<<<<<< If Femtet.SaveProject(ProjectFilePath & ".femprj", True) = False Then  
    Femtet.ShowLastError  
<<<<<<< End If  
  
;----- メッシュの生成 -----  
<<<<<<< メッシュを生成する場合は以下のコメントを外してください >>>>>>>  
Gaudi.Mesh  
  
;----- 解析の実行 -----  
<<<<<<< 解析を実行する場合は以下のコメントを外してください >>>>>>>  
Femtet.Solve  
  
;----- 解析結果の抽出 -----  
<<<<<<< 計算結果を抽出する場合は以下のコメントを外してください >>>>>>>  
SamplingResult  
  
End Sub
```

FemtetMain関数に全体の処理の流れが記述されています。

それぞれの処理内容はコメントからおおよそ以下の流れとなっています。

新規プロジェクト (作成)

データベース設定

モデル作成

メッシュサイズ設定

プロジェクト保存

メッシュ生成

解析

結果抽出

解析条件
ボディ属性
材料定数
境界条件

4-3 データベースの設定

解析条件設定 AnalysisSetUp

ボディ属性設定 BodyAttributeSetUp → BodyAttributeSetUp_Case

材料定数設定 MaterialSetUp → MaterialSetUp_AI

境界条件設定 BoundarySetUp

- BoundarySetUp_RESERVED_default
- BoundarySetUp_Fix
- BoundarySetUp_Pressure

解析条件以外は個別の属性の設定関数が呼ばれています。

当モデルはボディが一つなのでボディ属性、材料定数の個別関数は1つですが、境界条件では3つの個別関数が呼ばれています。

個別関数の数はモデルによって変わります。

4-3 データベースの設定

AnalysisSetUpのコードと実際のFemtetの解析条件の設定を比較します

```
'////////////////////////////////////  
' 解析条件の設定  
'////////////////////////////////////  
Sub AnalysisSetUp()  
  
'----- 変数にオブジェクトの設定 -----  
Set Als = FEMTET.Analysis  
  
'----- 解析条件共通(Common) -----  
Als.AnalysisType = GALILEO_C  
  
'----- 磁場(Gauss) -----  
Als.Gauss.b2ndEdgeElement = True  
  
'----- 電磁波(Hertz) -----  
Als.Hertz.b2ndEdgeElement = True  
  
'----- 調和解析(Harmonic) -----  
Als.Harmonic.FreqSweepType = LINEAR_INTERVAL_C  
  
'----- 熱荷重(ThermalStress) -----  
Als.ThermalStress.Set_Table 1, (0)  
  
'----- 高度な設定(HighLevel) -----  
Als.HighLevel.nNonL = (20)  
Als.HighLevel.bATS = False  
Als.HighLevel.FactorType = RADIU ANAI YTIADI C
```



ソルバ選択や解析オプション設定など
各種解析条件が記述されます

4-3 データベースの設定

MaterialSetUp_AIのコードと実際のFemtetの材料AIの設定を比較します

```

'//////////
' Materialの設定 Material名: AI
'//////////
Sub MaterialSetUp_AI()
'----- MaterialのIndexを保存する変数 -----
Dim Index As Integer

'----- Materialの追加 -----
Mtl.Add "AI"

'----- Material Indexの設定 -----
Index = Mtl.Ask("AI")

'----- 線膨張係数(Expansion) -----
Mtl.Expansion(Index).sAlf = (0#)
Mtl.Expansion(Index).Set_vAlf 0, (0#)
Mtl.Expansion(Index).Set_vAlf 1, (0#)
Mtl.Expansion(Index).Set_vAlf 2, (0#)

'----- 弾性定数(Elasticity) -----
Mtl.Elasticity(Index).sY = (7) * 10 ^ (10)

'----- 粘度(Viscosity) -----
Mtl.Viscosity(Index).Mu = (1.002) * 10 ^ (-3)

'----- 着磁(Magnetize) -----
Mtl.Magnetize(Index).MagRatioType = MAGRATIO_BR_C
End Sub

```

材料定数の編集 [AI]

弾性定数

クリープ

粘弾性

超弾性

説明

弾性定数

材料の種類

弾性 - 等方性

弾性 - 異方性

弾塑性バイリニア

弾塑性マルチリニア

温度依

なし

あり

弾性定

ス

コ

ヤング率

10

7 X10 [Pa]

ポアソン比

0.3

4-3 データベースの設定

BoundarySetUp_Pressureのコードと実際のFemtetの境界条件Pressureの設定を比較します

```
'////////////////////////////////////  
' Boundaryの設定 Boundary名 : Pressure  
'////////////////////////////////////  
Sub BoundarySetUp_Pressure()  
'----- BoundaryのIndexを保存する変数 -----  
Dim Index As Integer  
  
'----- Boundaryの追加 -----  
Bnd.Add "Pressure"  
  
'----- Boundary Indexの設定 -----  
Index = Bnd.Ask("Pressure")  
  
'----- 機械(Mechanical) -----  
Bnd.Mechanical(Index).Condition = PRESSURE_C  
Bnd.Mechanical(Index).P = (1) * 10 ^ (2)  
  
'----- 室温_環境温度(RoomTemp) -----  
Bnd.Thermal(Index).RoomTemp.Temp = (0)  
  
'----- 流体(Fluid) -----  
Bnd.Fluid(Index).VelocityCondition = XYZ_VELOCITY_C  
  
'----- 流体(FluidBern) -----  
Bnd.FluidBern(Index).Condition = SOLID_WALL_C  
Bnd.FluidBern(Index).P = (0#)  
Bnd.FluidBern(Index).TempType = TEMP_DIRECT_C  
End Sub
```

境界条件の編集 [Pressure]

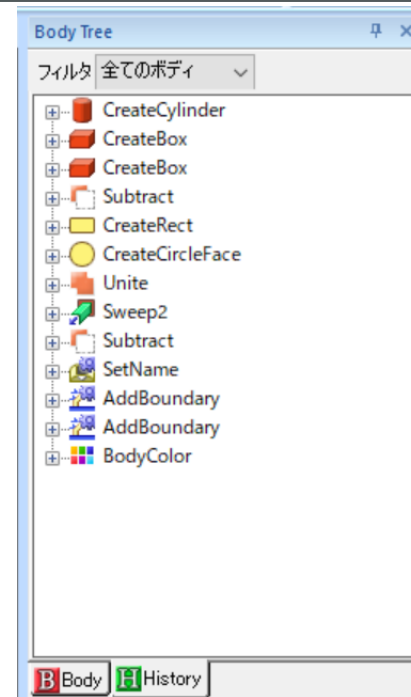
機械	機械
対称/不連続	境界条件の種類
説明	<input type="radio"/> 変位 <input type="radio"/> 集中荷重(点) <input type="radio"/> 簡易
	<input type="radio"/> 垂直変位 <input type="radio"/> 分布荷重(線) <input type="radio"/> 接触
	<input type="radio"/> 回転変位 <input type="radio"/> 分布荷重(面) <input type="radio"/> ばね
	<input type="radio"/> 加速度 <input checked="" type="radio"/> 圧力 <input type="radio"/> リモ-
	<input type="radio"/> トルク荷重
	<input type="radio"/> ジョイント荷重

トータル荷重で入力する

1 X10² [Pa]

4-4 モデル作成関数 (MakeModel)

```
//////  
' モデル作成関数  
Sub MakeModel()  
'----- Body配列変数の定義 -----  
Dim Body() As CGaudiBody  
  
'----- モデルを描画させない設定 -----  
FEMTET.RedrawMode = False  
  
'----- CreateCylinder -----  
ReDim Preserve Body(0)  
Dim Point0 As New CGaudiPoint  
Point0.SetCoord 0#, 0#, 0#  
Set Body(0) = Gaudi.CreateCylinder(Point0, 10#, 10#)  
  
'----- CreateBox -----  
ReDim Preserve Body(1)  
Dim Point1 As New CGaudiPoint  
Point1.SetCoord -10#, 8#, 0#  
Set Body(1) = Gaudi.CreateBox(Point1, 20#, 4#, 7#)  
  
'----- CreateBox -----  
ReDim Preserve Body(2)  
Dim Point2 As New CGaudiPoint  
Point2.SetCoord -10#, -12#, 0#  
Set Body(2) = Gaudi.CreateBox(Point2, 20#, 4#, 7#)  
  
'----- Subtract -----  
ReDim Preserve Body(3)  
Dim BodyArray0(1) As CGaudiBody  
Dim BodyArray1() As CGaudiBody  
Set BodyArray0(0) = Body(1)  
Set BodyArray0(1) = Body(2)  
Body(3).Subtract2 BodyArray0, BodyArray1, 1  
Set Body(3) = BodyArray1(0)  
  
'----- CreateRect -----  
ReDim Preserve Body(4)  
Dim Point3 As New CGaudiPoint  
Point3.SetCoord -8#, -4#, 0#  
Set Body(4) = Gaudi.CreateRect(Point3, 16#, 8#)  
  
'----- CreateCircleFace -----  
ReDim Preserve Body(5)  
Dim Point4 As New CGaudiPoint  
Point4.SetCoord 0#, 0#, 0#  
Set Body(5) = Gaudi.CreateCircleFace(Point4, 5#)  
  
'----- Unite -----  
ReDim Preserve Body(6)  
Dim BodyArray2(0) As CGaudiBody  
Dim BodyArray3() As CGaudiBody  
Set BodyArray2(0) = Body(5)  
Body(4).Unite BodyArray2, BodyArray3, True  
Set Body(6) = BodyArray3(0)  
  
'----- Sweep2 -----  
Dim Vector0 As New CGaudiVector  
Vector0.SetCoord 0#, 0#, 9#  
Body(6).Sweep2 Vector0  
  
'----- Subtract -----  
ReDim Preserve Body(7)  
Dim BodyArray4(0) As CGaudiBody  
Dim BodyArray5() As CGaudiBody  
Set BodyArray4(0) = Body(6)  
Body(3).Subtract2 BodyArray4, BodyArray5, 1  
Set Body(7) = BodyArray5(0)  
  
'----- SetName -----  
Body(7).SetName "Case", "A1"  
  
'----- AddBoundary -----  
Dim Face0 As CGaudiFace  
Set Face0 = Body(7).GetFaceByID(9)  
Face0.AddBoundary "Fix"  
  
'----- AddBoundary -----  
Dim Face1 As CGaudiFace  
Set Face1 = Body(7).GetFaceByID(325)  
Face1.AddBoundary "Pressure"  
  
'----- AddBoundary -----  
Dim Face1 As CGaudiFace  
Set Face1 = Body(7).GetFaceByID(325)  
Face1.AddBoundary "Pressure"  
  
'----- BodyColor -----  
Body(7).Color = &HFFFF80  
  
'----- モデルを再描画します -----  
FEMTET.Redraw
```



MakeModel関数にはモデル作成の履歴が記述されています。
Historyタブの記録と対応しています。

4-5 結果取得関数

```
'//////////計算結果抽出関数
'//////////
Sub SamplingResult()

'----- 変数にオブジェクトの設定 -----
Set Gogh = FEMTET.Gogh

FEMTET.SavePDT FEMTET.ResultFilePath & ".pdt", True 'pdtファイルを保存します
FEMTET.OpenPDT FEMTET.ResultFilePath & ".pdt", True 'pdtファイルを開きます

'----- フィールドの設定 -----
Gogh.Galileo.Vector = GALILEO_DISPLACEMENT_C

'----- 最大値の取得 -----
Dim PosMax() As Double '最大値の座標
Dim ResultMax As Double '最大値

If Gogh.Galileo.GetMAXVectorPoint(VEC_C, CMPX_REAL_C, PosMax, ResultMax) = False Then
    FEMTET.ShowLastError
End If

'----- 最小値の取得 -----
Dim PosMin() As Double '最小値の座標
Dim ResultMin As Double '最小値

If Gogh.Galileo.GetMINVectorPoint(VEC_C, CMPX_REAL_C, PosMin, ResultMin) = False Then
    FEMTET.ShowLastError
End If

'----- 任意座標の計算結果の取得 -----
Dim Value() As New CComplex

If Gogh.Galileo.GetVectorAtPoint(0, 0, 0, Value()) = False Then
    FEMTET.ShowLastError
End If

' 複数の座標の結果をまとめて取得する場合は、MultiGetVectorAtPoint関数をご利用ください。

End Sub
```

データベース設定やモデル作成はFemtetの設定やモデル作成履歴がそのままコードとして出力される。

しかし結果取得関数はソルバー設定に応じた代表的な結果取得のサンプルコードが出力されているにすぎない。

応力解析の場合は、最大変位、最小変位任意座標の変位ベクトルを取得するサンプルコードが記述されている。

カスタマイズするにはマクロヘルプを参考にしてコードを編集する必要がある。
→難易度はやや高い

4-6 結果取得までマクロ実行する

```
'//////////計算結果抽出関数
'//////////
Sub SamplingResult()

'----- 変数にオブジェクトの設定 -----
Set Gogh = FEMTET.Gogh

FEMTET.SavePDT FEMTET.ResultFilePath & ".pdt", True 'pdtファイルを保存します
FEMTET.OpenPDT FEMTET.ResultFilePath & ".pdt", True 'pdtファイルを開きます

'----- フィールドの設定 -----
Gogh.Galileo.Vector = GALILEO_DISPLACEMENT_C

'----- 最大値の取得 -----
Dim PosMax() As Double '最大値の座標
Dim ResultMax As Double '最大値

If Gogh.Galileo.GetMAXVectorPoint(VEC_C, CMPX_REAL_C, PosMax, ResultMax) = False Then
    FEMTET.ShowLastError
End If

'----- 最小値の取得 -----
Dim PosMin() As Double '最小値の座標
Dim ResultMin As Double '最小値

If Gogh.Galileo.GetMINVectorPoint(VEC_C, CMPX_REAL_C, PosMin, ResultMin) = False Then
    FEMTET.ShowLastError
End If

'----- 任意座標の計算結果の取得 -----
Dim Value() As New CComplex

If Gogh.Galileo.GetVectorAtPoint(0, 0, 0, Value()) = False Then
    FEMTET.ShowLastError
End If

' 複数の座標の結果をまとめて取得する場合は、MultiGetVectorAtPoint関数をご利用ください。

End Sub
```

10に変更

サンプルコードでは結果取得を実施していますが、その結果をどこにも出力していません。

以下のコードを末尾に追記して結果をワークシートに出力してみましょう

```
Cells(1, 1) = ResultMax
Cells(2, 1) = PosMax(0)
Cells(3, 1) = PosMax(1)
Cells(4, 1) = PosMax(2)
```

```
Cells(6, 1) = ResultMin
Cells(7, 1) = PosMin(0)
Cells(8, 1) = PosMin(1)
Cells(9, 1) = PosMin(2)
```

```
Cells(11, 1) = Value(0).Real
Cells(12, 1) = Value(1).Real
Cells(13, 1) = Value(2).Real
```

4-6 結果取得までマクロ実行する

```
'----- メッシュの生成 -----  
'<<<<<<< メッシュを生成する場合は以下  
'Gaudi.Mesh  
  
'----- 解析の実行 -----  
'<<<<<<< 解析を実行する場合は以下のこ  
'FEMTET.Solve  
  
'----- 解析結果の抽出 -----  
'<<<<<<< 計算結果を抽出する場合は以下  
'SamplingResult
```

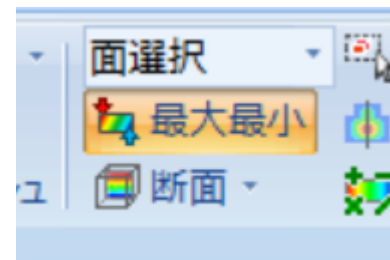
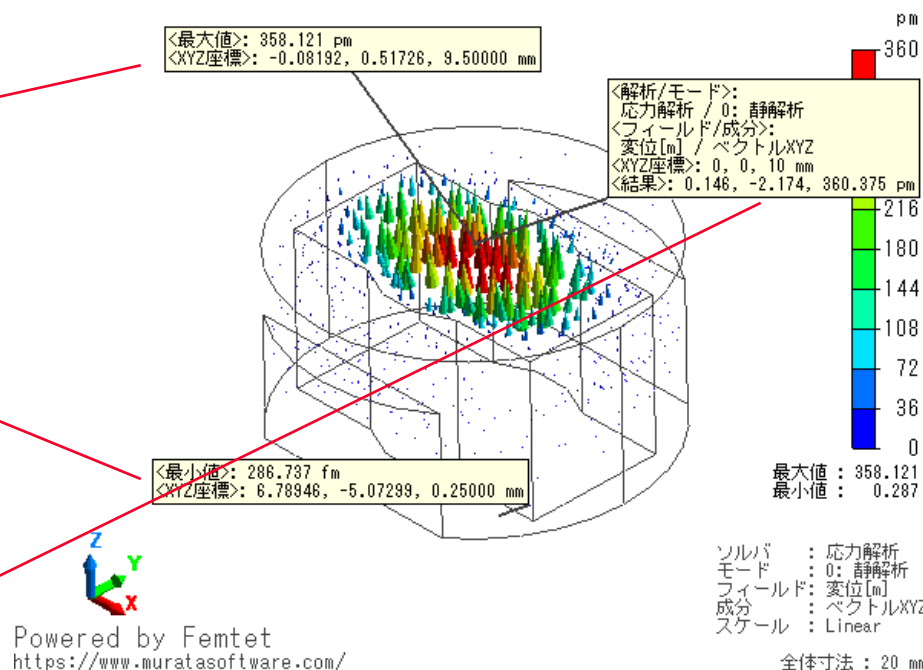


```
'----- メッシュの生成 -----  
'<<<<<<< メッシュを生成する場合は以下のコメン  
→ Gaudi.Mesh  
  
'----- 解析の実行 -----  
'<<<<<<< 解析を実行する場合は以下のコメントを:  
→ FEMTET.Solve  
  
'----- 解析結果の抽出 -----  
'<<<<<<< 計算結果を抽出する場合は以下のコメン  
→ SamplingResult
```

FemtetMain関数の終盤の
メッシュの生成、解析の実行、計算結果の抽出の処理について
上の3行のコメントを外します。
「'」を消します。

4-6 結果取得までマクロ実行する

	A
1	3.58E-10
2	-0.08192
3	0.517257
4	9.5
5	
6	2.87E-13
7	6.789456
8	-5.07299
9	0.25
10	
11	1.46E-13
12	-2.2E-12
13	3.6E-10
14	



結果表示の結果とマクロ取得の結果が一致している

VBAでプログラムを作成する際に、数値のデータや文字列のデータ等を保存する入れ物として変数を使用します。

変数がどのようなデータを扱うかは指定する「型」によって変わります。以下の表はVBAでコードを書く上でよく使用する型をまとめたものです。

データ型		使用メモリ	値
ブール型	Boolean	2バイト	True または False
整数型	Integer	2バイト	-32,768 ~ 32,767 の整数
長整数型	Long	4バイト	-2,147,483,648~2,147,483,647の整数
倍精度浮動小数点型	Double	8バイト	(負) -1.79769313486231E308~ -4.94065645841247E-324 (正) 4.94065645841247E-324~ 1.79769313486231E308
文字列型	String	10バイト+文字列の長さ	文字データ
オブジェクト型	Object	4バイト	オブジェクトを参照するデータ
バリエーション型	Variant		全ての値

Sub FemtetMain()、Sub InitVariables()といった処理をまとめたものをプロシージャと呼びます。Sub ~()という定義の場合、プロシージャ内の処理を実行するだけ、Function ~()という定義の場合、プロシージャ内の処理を実行し呼び出し元に戻り値(例えばプロシージャ内で足し算を行いその結果を戻り値とする)を返します。

```
'//////////  
' 変数定義関数  
'//////////  
Sub InitVariables() ← プロシージャ  
  
'変数の定義 ← コメント  
pi = 3.14159265358979  
  
End Sub
```

「'」を入れると以降の文字列はコメント文扱いとなり処理されません。プロシージャ内の処理内容などを記述しておくといは良いです。

【VBA文法】セルとの数値の出入力

Cells(1, 1) = ResultMax
Cells(2, 1) = PosMax(0)
Cells(3, 1) = PosMax(1)
Cells(4, 1) = PosMax(2)

Cells(6, 1) = ResultMin
Cells(7, 1) = PosMin(0)
Cells(8, 1) = PosMin(1)
Cells(9, 1) = PosMin(2)

Cells(11, 1) = Value(0).Real
Cells(12, 1) = Value(1).Real
Cells(13, 1) = Value(2).Real

行番号、列番号

	A	
1	3.58E-10	
2	-0.08192	
3	0.517257	
4	9.5	
5		
6	2.87E-13	
7	6.789456	
8	-5.07299	
9	0.25	
10		
11	1.46E-13	
12	-2.2E-12	
13	3.6E-10	
14		

Cells(行番号、列番号)
で各セルに値を出力したり、

逆に変数にセルの値や文字を入力
することもできる

例：
A = Cells(1,1)

If文は条件によって処理を分けたい場合に使用します。
条件分岐で処理を柔軟に制御できるようになります。

```
'----- 新規プロジェクト -----  
If FEMTET.OpenNewProject() = False Then  
    FEMTET.ShowLastError  
End If
```

【2分岐】

```
If a = 1 Then  
    b = 1  
Else  
    b = 2  
End If
```

【3分岐】

```
If a = 1 Then  
    b = 1  
ElseIf a = 2 Then  
    b = 2  
Else  
    b = 3  
End If
```

【書式】

基本的な書式は“If 条件 Then 処理 End If”となります。
条件を満たすとき処理を実行するという事になります。
←のコードの場合OpenNewProject()の戻り値がFalseの時、
Femtet.ShowLastErrorを実行するという処理になります。

【複雑な条件分岐】

2分岐の場合⇒“If 条件 Then 処理1 Else 処理2 End If”
条件を満たすとき処理1、満たさないとき処理2を実行します。

3分岐以上の場合⇒“If 条件1 Then 処理1 ElseIf 条件2 Then 処理2 Else ~ End If”
条件1を満たすとき処理1、条件2を満たすとき処理2～という流れで処理を実行
します。

【複数条件を満たす】

```
If a = 1 And b = 1 Then  
    X = 1  
End If
```

【いずれかの条件を満たす】

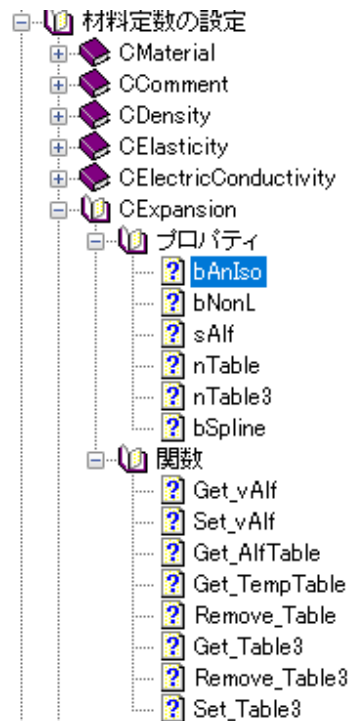
```
If a = 1 Or b = 1 Then  
    X = 1  
End If
```

【複雑な条件分岐】

複数の条件を満たす場合⇒“If **条件1 And 条件2** Then 処理 End If”
条件1と条件2を両方満たす場合、処理を実行します。

いずれかの条件を満たす場合⇒“If **条件1 Or 条件2** Then 処理 End If”
条件1あるいは条件2を満たすとき処理を実行します。

関数とプロパティではコードの記述が異なります。線膨張係数の例を示します。



sAlfプロパティ

定義

sAlf As Double

値の取得 ○

値の設定 ○

引数

引数はありません

解説

線膨張係数を設定、取得します。

実行例

```
Dim Femtet As New CFemtet  
Dim Mat As CMaterial
```

```
If Femtet.OpenNewProject() = False Then  
    Femtet.ShowLastError  
End If
```

*Femtet.Material を変数Mat に代入して使いやすくする

```
Set Mat = Femtet.Material
```

```
Mat.Add "MaterialA"
```

```
Mat.Expansion(0).sAlf = 0.000001
```

単純に代入または参照

Get_vAlf関数

マクロヘルプ
より

定義

Get_vAlf (Index As Long) As Double

戻り値

異方性線膨張係数（温度依存性なし）の指定Index値

引数

異方性線膨張係数（温度依存性なし）のインデックス
インデックス値と各成分は以下のように対応しています。

Index	インデックス値	成分
	0	x
	1	y
	2	z

解説

異方性線膨張係数（温度依存性なし）の指定Index値を取得します。

実行例

```
Dim Femtet As New CFemtet  
Dim Mat As CMaterial  
Dim dData As Double
```

```
If Femtet.LoadProject("C:\¥Test¥test.femprj", True) = False Then  
    Femtet.ShowLastError  
End If
```

*Femtet.Material を変数Mat に代入して使いやすくする

```
Set Mat = Femtet.Material
```

```
dData = Mat.Expansion(0).Get_vAlf(0)
```

引数を指定して
取得または設定

5章ではマクロコードを変更して応力解析から熱伝導解析の条件に変更していきます。

少しずつ変更を加えて、その変更が実際に反映されているかを確認することで、少しずつマクロを理解を深めていくことができます。

```
'----- メッシュの生成 -----  
'<<<<<<< メッシュを生成する場合は以下のこ  
→ Gaudi.Mesh  
  
'----- 解析の実行 -----  
'<<<<<<< 解析を実行する場合は以下のコメン  
→ FEMTET.Solve  
  
'----- 解析結果の抽出 -----  
'<<<<<<< 計算結果を抽出する場合は以下のこ  
→ SamplingResult
```



```
'----- メッシュの生成 -----  
'<<<<<<< メッシュを生成する場合は以  
'Gaudi.Mesh  
  
'----- 解析の実行 -----  
'<<<<<<< 解析を実行する場合は以下のこ  
'FEMTET.Solve  
  
'----- 解析結果の抽出 -----  
'<<<<<<< 計算結果を抽出する場合は以  
'SamplingResult
```

FemtetMain関数の終盤の

メッシュの生成、解析の実行、計算結果の抽出の処理について上の3行をコメントアウトします。「'」を最初に付けます。

5. データベース設定を変更する

実際にコードを少しずつ変更し動作確認をして理解を深めていきましょう

- 5-1 解析条件の変更 (ソルバー選択)
- 5-2 材料定数の編集 (熱伝導率の編集)
- 5-3 境界条件の変更 (温度境界の設定)
- 5-4 境界条件の変更 (外部境界の設定)

5-1 解析条件の変更 (ソルバー選択)

Als.AnalysisTypeで解析条件のソルバを指定することができます。
「=」まで消した後、あらためて「=」を入力するとENUM値一覧が表示されます。

```
Sub AnalysisSetUp()  
'----- 変数にオブジェクトの設定 -----  
Set Als = FEMTET.Analysis  
  
'----- 解析条件共通(Common) -----  
Als.AnalysisType = |  
  
'----- 磁場(Gauss) -----  
Als.Gauss.b2ndEdgeElement = True  
  
'----- 電磁波(Hertz) -----
```



```
Sub AnalysisSetUp()  
'----- 変数にオブジェクトの設定 -----  
Set Als = FEMTET.Analysis  
  
'----- 解析条件共通(Common) -----  
Als.AnalysisType = |  
  
'----- 磁場(Gauss) -----  
Als.Gauss.b2ndEdgeElement = True  
  
'----- 電磁波(Hertz) -----  
Als.Hertz.b2ndEdgeElement = True  
  
'----- 調和解 -----  
Als.Hertz.b2ndEdgeElement = True
```



ENUM値「WATT_C」(熱伝導解析)
に指定してみます。

5-1 解析条件の変更（動作確認）

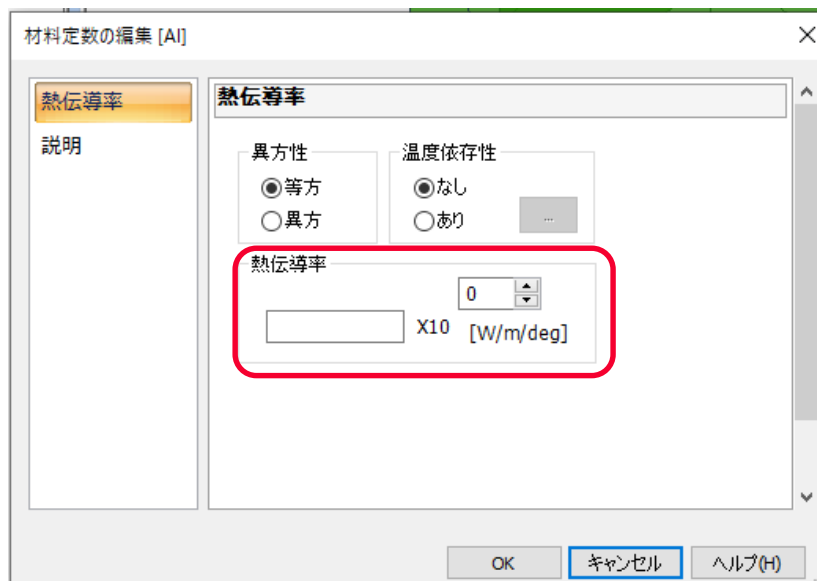
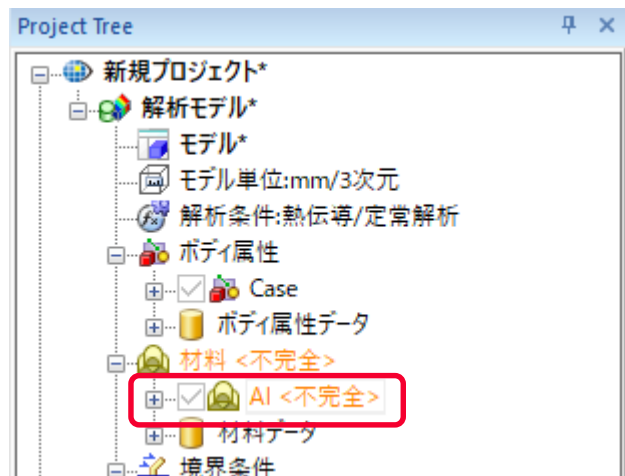
Als.AnalysisTypeのENUM値を変更したら、マクロを実行します。
実行後、Femtet画面で解析条件を確認すると、熱伝導解析に替わっているはずですが。



5-2 材料定数の編集（熱伝導率の編集）

次に、材料定数を変更してみます。

解析条件を熱伝導解析に変更したので、熱伝導率を設定する必要があります。



Femtet画面で確認すると、材料「AI」が不完全となり、熱伝導率が空になっています。

5-2 材料定数の編集（熱伝導率の編集）

材料「AI」の内容を設定しているMaterialSetUp_AIプロセスに熱伝導率を設定するコードを追加します。

熱伝導率はCThermalConductivityクラスのsRmdプロパティで指定します。

```
Sub MaterialSetUp_AI()  
'----- MaterialのIndexを保存する変数 -----  
Dim Index As Integer  
  
'----- Materialの追加 -----  
Mtl.Add "AI"  
  
'----- Material Indexの設定 -----  
Index = Mtl.Ask("AI")  
  
Mtl.ThermalConductivity(Index).sRmd = 1.5]  
  
'----- 線膨張係数(Expansion) -----  
Mtl.Expansion(Index).sAlf = (0#)  
Mtl.Expansion(Index).Set_vAlf 0, (0#)  
Mtl.Expansion(Index).Set_vAlf 1, (0#)  
Mtl.Expansion(Index).Set_vAlf 2, (0#)
```

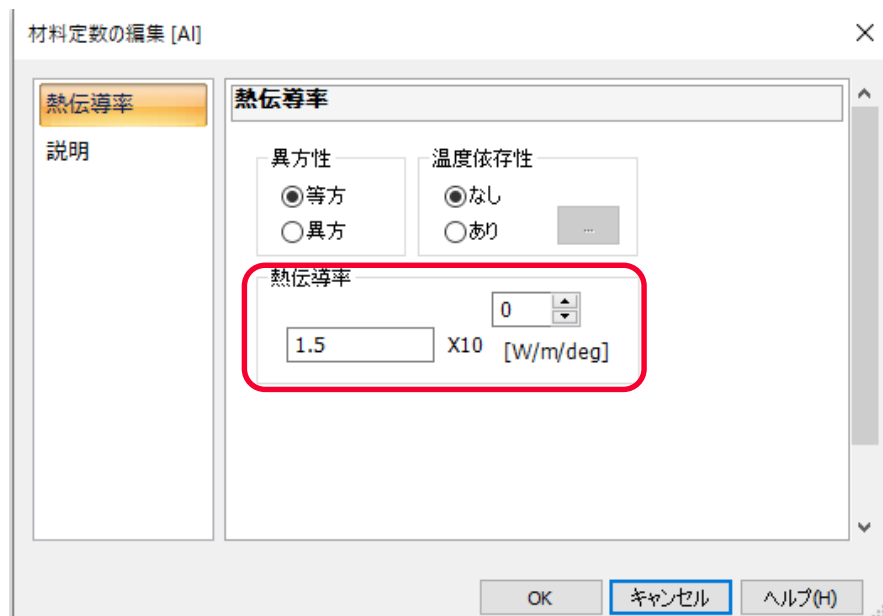
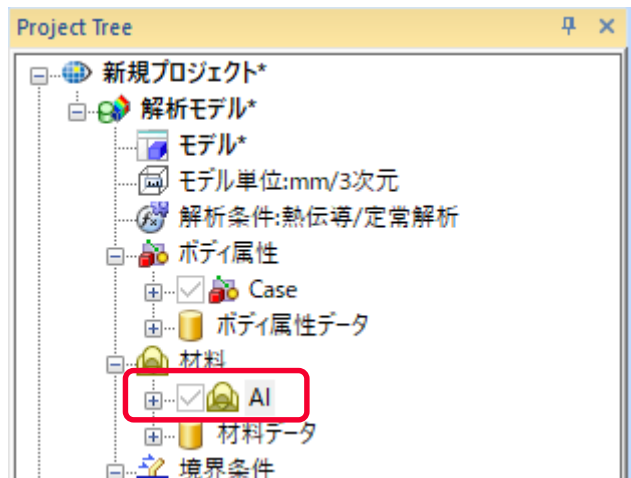
CThermalConductivityプロパティリスト

プロパティ名	説明
bAniso	等方/異方
bNonL	温度依存性 あり/なし
nTable	等方性温度依存性テーブルのデータ数
nTable6	異方性温度依存性テーブルのデータ数
bSpline	温度依存性テーブルの近似方法
sRmd	熱伝導率

Indexの値を取得した以降にこのコードを追加します。

5-2 材料定数の編集（動作確認）

sRmdプロパティを追加したらマクロを実行します。
材料AIに熱伝導率が設定されている事が確認できます。



5-3 境界条件の変更（温度境界の設定）

次に境界条件を変えてみます。熱伝導解析に変更しているのので、境界条件Fix、Pressureを温度の条件に変えてみましょう。境界条件の種類はConditionプロパティ、温度はCWallTempクラスのTempプロパティで指定します。

```
Sub BoundarySetup_Fix()  
'----- BoundaryのIndexを保存する変数 -----  
Dim Index As Integer  
  
'----- Boundaryの追加 -----  
Bnd.Add "Fix"  
  
'----- Boundary Indexの設定 -----  
Index = Bnd.Ask("Fix")
```

```
Bnd.Thermal(Index).Condition = TEMPERATURE_C  
Bnd.Thermal(Index).WallTemp.Temp = 25
```

```
Sub BoundarySetup_Pressure()  
'----- BoundaryのIndexを保存する変数 -----  
Dim Index As Integer  
  
'----- Boundaryの追加 -----  
Bnd.Add "Pressure"  
  
'----- Boundary Indexの設定 -----  
Index = Bnd.Ask("Pressure")
```

```
Bnd.Thermal(Index).Condition = TEMPERATURE_C  
Bnd.Thermal(Index).WallTemp.Temp = 50
```

CWallTempプロパティリスト

プロパティ名	説明
--------	----

Temp	温度
------	----

Conditionプロパティに「TEMPERTURE_C」Fixの温度を25度、Pressureの温度を50度に設定します。

5-3 境界条件の変更（外部境界の設定）

さらに外部境界条件を放熱・環境輻射、自然対流（係数自動計算）の条件に変えてみましょう。自然対流（係数自動計算）の指定は**bConAuto**プロパティで指定します。

```
Sub BoundarySetup_RESERVED_default()  
'----- BoundaryのIndexを保存する変数 -----  
Dim Index As Integer  
  
'----- Boundaryの追加 -----  
Bnd.Add "RESERVED_default"  
  
'----- Boundary Indexの設定 -----  
Index = Bnd.Ask("RESERVED_default")  
  
Bnd.Thermal(Index).Condition = HEAT_TRANSFER_C  
Bnd.Thermal(Index).bConAuto = True  
  
'----- 室温 環境温度(RoomTemp) -----  
Bnd.Thermal(Index).RoomTemp.Temp = 25]
```

Conditionプロパティに「HEAT_TRANSFER_C」、
bConAutoプロパティに「True」を指定します。
室温(RoomTemp.Tempプロパティ)を25度に変えておきます。

CThermalプロパティリスト

プロパティ名	説明
Condition	境界条件の種類
WallTemp	温度 (CWallTemp) オブジェクト
HeatFlux	熱流束の設定
ThermRType	抵抗の入力形式
ThermR	熱抵抗、面積当たり熱抵抗
ThermRCond	熱抵抗の熱伝導率成分
ThermRThickness	熱抵抗の厚み成分
bOpen	熱抵抗設定面を、応力解析で開放にするかどうか
bInsulate	熱抵抗設定面を、電場解析で絶縁にするかどうか
bH	熱伝達係数の考慮の有無
bFcon	強制対流の考慮の有無
bConAuto	自然対流（係数自動計算）の考慮の有無
bCon	自然対流の考慮の有無

5-3 境界条件の変更（動作確認）

境界条件の内容を変更したらFemtetMainプロセスを実行します。
境界条件Fix、Pressureが温度の条件、外部境界条件が放熱・環境輻射の条件に替わっています。

「Fix」

境界条件の編集 [Fix]

熱

対称/不連続

説明

境界条件の種類

- 温度
- 熱流束
- 放熱・環境輻射
- 物体間輻射
- 断熱(設定なし)

25 [deg]

「Pressure」

境界条件の編集 [Pressure]

熱

対称/不連続

説明

境界条件の種類

- 温度
- 熱流束
- 放熱・環境輻射
- 物体間輻射
- 断熱(設定なし)

50 [deg]

「外部境界条件」

境界条件の編集 [外部境界条件]

熱

対称/不連続

説明

境界条件の種類

- 温度
- 熱流束
- 放熱・環境輻射
- 物体間輻射
- 断熱(設定なし)

室温(環境温度)

25 [deg]

環境への放熱の形態

- 熱伝達係数直接指定
- 強制対流
- 風速 X10 [m/]
- 自然対流 (係数自動計算)

6章ではマクロコードを変更してモデル寸法を変更します。

MakeModel関数のどの部分を変更したい寸法に対応するのかを突き止めてからコードを変更します。

6.モデルの寸法を変更する

- 6-1.変えたい寸法の提示
- 6-2.モデルの履歴からの確認
- 6-3.コードを変更

配列は変数をまとめておく入れ物のようなものです。例えば、コピーコマンドの実行結果として複数のボディが生成される場合に、結果のボディの格納先として配列が使用されます。

```
Sub TestFunc()  
    Dim X(6) As String  
  
    X(0) = "sunday"  
    X(1) = "monday"  
  
End Sub
```

【宣言方法と値の設定】

配列の宣言方法は←のコードのように、“配列名(要素数) As 変数の型”という書式で宣言します。

要素数は0から数えるので、左のコードだとString型のデータを7つ(0~6)もつ配列Xを定義することになります。

配列に値を設定するには“配列名(何番目) = 値”という書式で設定します。

```
Sub TestFunc()  
    Dim X(6) As String  
    Dim Size As Long  
  
    Size = 100  
    ReDim X(Size)  
  
End Sub
```

【要素数の変更】

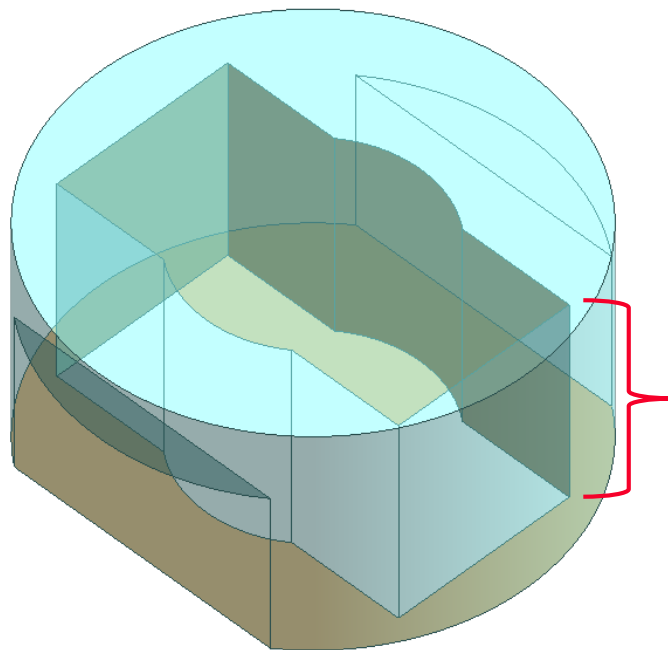
配列の要素数を後で変更する場合、“Redim 配列名(要素数)”という書式で設定します。

Redimで要素数を変更すると要素内のデータはクリアされます。

データを残しつつ要素数を変更したい場合は、“Redim Preserve 配列名(要素数)”という書式で設定してください。

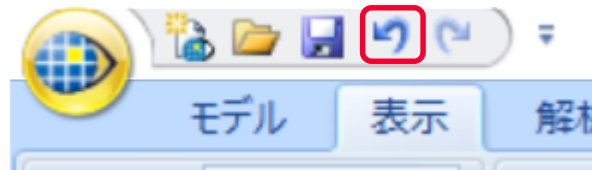
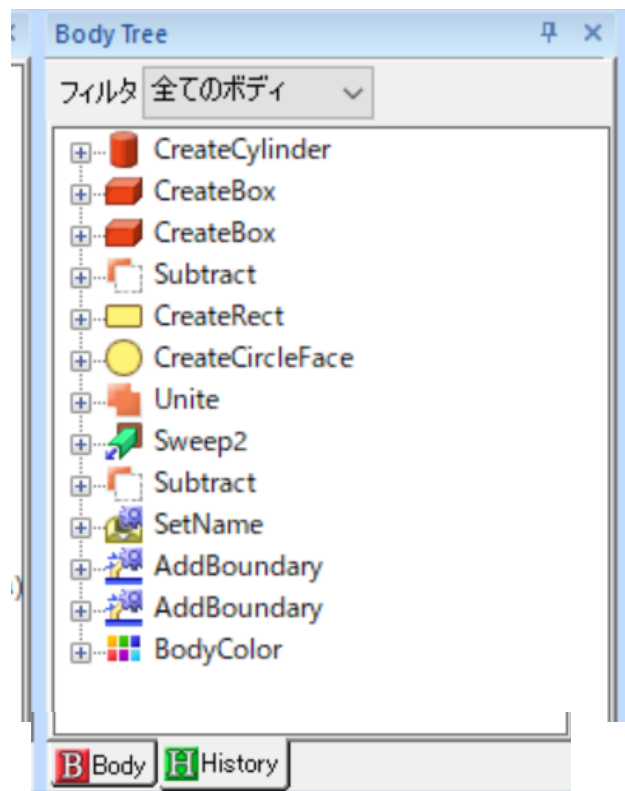
6-1.変えたい寸法の提示

作成されるモデルの穴部分の深さをコードを書き換えて変更してみましょう。



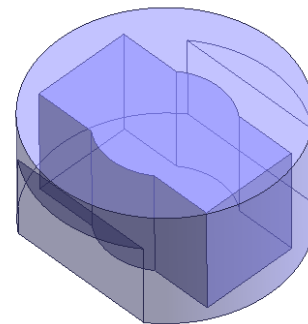
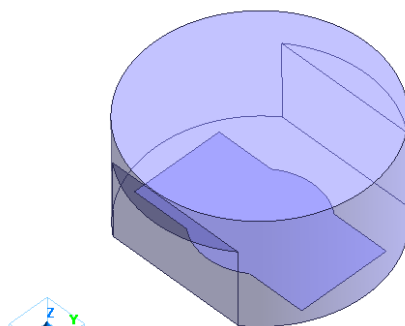
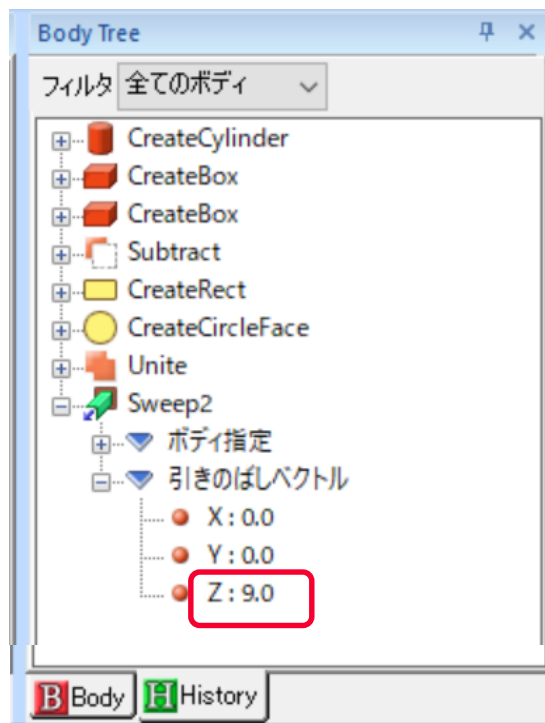
この部分の深さを変更します。

6-2.モデルの履歴からの確認



Undoして穴の深さに影響する作図処理を特定します。

6-2.モデルの履歴からの確認



全体寸法 : 20 mm



全体寸法 : 20 mm

Uniteの後のSweep2が穴の深さに影響していることが分かります。

実際に引き伸ばしベクトルのZ成分を変更して確認します。

6-3.コードを変更

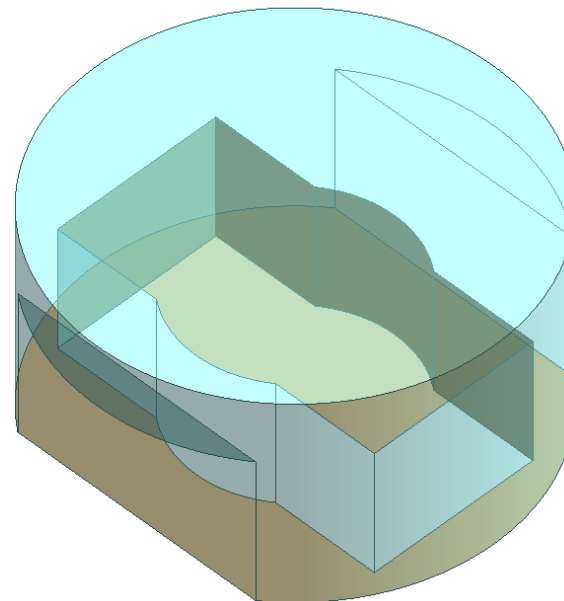
穴部分の深さに該当するのは、Sweep2関数のVector0の3つ目の値になります。

```
'----- Sweep2 -----  
Dim Vector0 As New CGaudiVector  
Vector0.SetCoord 0#, 0#, 9#  
Body(6).Sweep2 Vector0
```



Vector0の値を0,0,6
に変更します。

```
'----- Sweep2 -----  
Dim Vector0 As New CGaudiVector  
Vector0.SetCoord 0#, 0#, 6#  
Body(6).Sweep2 Vector0
```



Vector0の値を変えたらマクロを実行します。
穴部分の深さが浅くなっています。

7.メッシュサイズを変更し解析実行する

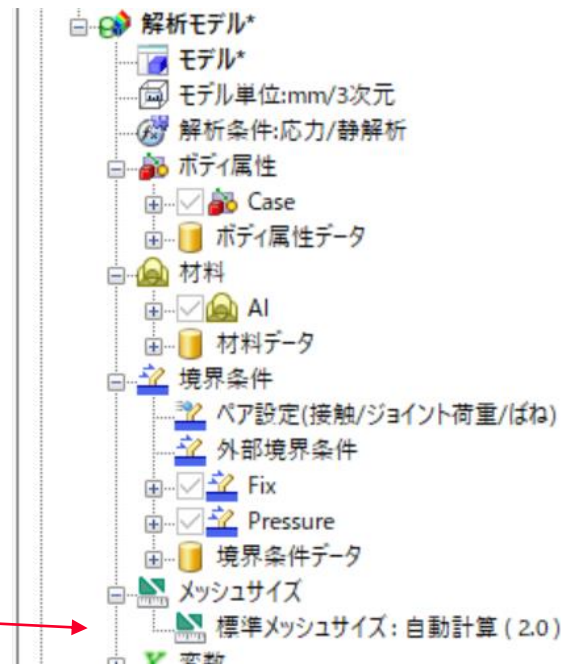
7-1 メッシュサイズを変更する

7-2 解析実行する

7-1.メッシュサイズを変更する

FemtetMain関数の標準メッシュサイズ設定を変更します。

```
Sub FemtetMain()  
'----- Femtet自動起動 (不要な場合やExcelで実行しない場合は下行をコメントアウト)  
Workbooks("FemtetRef.xla").AutoExecuteFemtet  
  
'----- 新規プロジェクト -----  
If FEMTET.OpenNewProject() = False Then  
    FEMTET.ShowLastError  
End If  
  
'----- 変数の定義 -----  
InitVariables  
  
'----- データベースの設定 -----  
AnalysisSetUp  
BodyAttributeSetUp  
MaterialSetUp  
BoundarySetUp  
  
'----- モデルの作成 -----  
Set Gaudi = FEMTET.Gaudi  
MakeModel  
  
'----- 標準メッシュサイズの設定 -----  
'<<<<<<< 自動計算に設定する場合は-1を設定してください >>>>>>>  
Gaudi.MeshSize = 2#
```

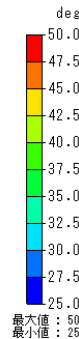
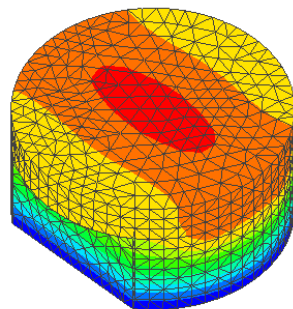


例えば 2 → 1へ変更します。

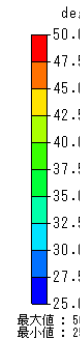
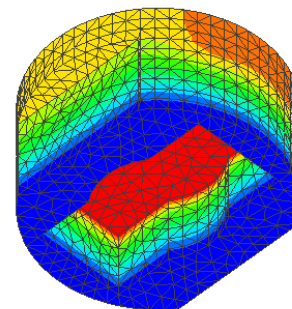
7-2.メッシュ生成し解析実行する

FemtetMain関数のメッシュ生成、解析実行のコメントを外しマクロを起動します。

```
'----- メッシュの生成 -----  
'<<<<<<<< メッシュを生成する場  
→ Gaudi.Mesh  
  
'----- 解析の実行 -----  
'<<<<<<<< 解析を実行する場合は  
→ FEMTET.Solve  
  
'----- 解析結果の抽出 -----  
'<<<<<<<< 計算結果を抽出する場  
'SamplingResult
```



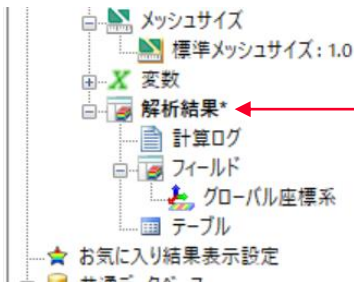
ソルバ : 熱伝導解析
モード : 0: 定常解析
フィールド: 温度[deg]
スケール : Linear
全体寸法 : 20 mm



ソルバ : 熱伝導解析
モード : 0: 定常解析
フィールド: 温度[deg]
スケール : Linear
全体寸法 : 20 mm

Powered by Femtet
<https://www.muratasoftware.com/>

Powered by Femtet
<https://www.muratasoftware.com/>



ダブルクリックで結果表示

8.解析結果の抽出内容を変更する

- 8-1. 取得するフィールドを温度に変更する
- 8-2. 温度の最大値、最小値を取得するコードに変更する
- 8-3. 指定座標の温度を取得するコードに変更する
- 8-4. 結果抽出までマクロ実行する

Femtetのフィールド分布の結果はその物理量によってポテンシャル、ベクトル、テンソルに分かれてきます。取得したいフィールドに応じた適切なフィールド設定が必要です。

	熱伝導解析 (Watt)	応力解析 (Galileo)
ポテンシャル※	温度	相当応力
ベクトル	熱流束	変位
テンソル	なし	応力、ひずみ

※スカラー量と同じです

Potential プロパティ

定義

Potential As [WATT_POT_I](#)
 値の取得
 値の設定

引数

ありません

解説

ポテンシャルの種類を設定、取得します。
[WATT_POT_I](#) で定義された種類を指定してください。

実行例		
WATT_TEMPERATURE_C		温度[deg]
WATT_RADIOISITY_C		射度[W/m2]
Dim Femt	WATT_FLUID_HEAT_TRANSFER_C	対流の熱伝達係数
Dim Goeh	[W/m2/deg]	
	WATT_HEAT_DENSITY_C	発熱密度[W/m2]
*Femtet	WATT_TURBULENT_THERMAL_CONDUCTIVITY_C	乱流熱伝導率[W/m/deg]
Set Goeh	WATT_RESIDUAL_C	残差[W]

*計算結果を参照

マクロヘルプより

8-1. 取得するフィールドを温度に変更する

SamplingResult関数を編集します。
取り出す計算結果を温度に変更しましょう。
取り出す結果の内容が応力解析の変位になっているので、
熱伝導解析の温度に変更します。

```
'----- フィールドの設定 -----  
Gogh.Galileo.Vector = GALILEO_DISPLACEMENT_C
```



```
'----- フィールドの設定 -----  
Gogh.Watt.Potential = WATT_TEMPERATURE_C
```

熱伝導解析の温度を取得するには、Watt.Potentialプロパティを「WATT_TEMPERATURE_C」に指定します。

Potentialプロパティ

定義

Potential As WATT_POT_I

値の取得

値の設定

引数

ありません

解説

ポテンシャルの種類を設定、取得します。
WATT_POT_I で定義された種類を指定してください。

WATT_TEMPERATURE_C	温度[deg]
WATT_RADIOSITY_C	射度[W/m ²]
Dir WATT_FLUID_HEAT_TRANSFER_C	対流の熱伝達係数
Dir [W/m ² /deg]	
WATT_HEAT_DENSITY_C	発熱密度[W/m ²]
*Fe WATT_TURBULENT_THERMAL_CONDUCTIVITY_C	乱流熱伝導率[W/m/deg]
Set WATT_RESIDUAL_C	残差[W]

*計算結果の欄へ

8-2. 温度の最大値、最小値を取得するコードに変更する

次に温度の最大値、最小値の値を取得します。

```
'----- 最大値の取得 -----  
Dim PosMax() As Double '最大値の座標  
Dim ResultMax As Double '最大値  
  
If Gogh.Galileo.GetMAXVectorPoint(VEC_C, CMPX_REAL_C, PosMax, ResultMax) = False Then  
    FEMTET.ShowLastError  
End If  
  
'----- 最小値の取得 -----  
Dim PosMin() As Double '最小値の座標  
Dim ResultMin As Double '最小値  
  
If Gogh.Galileo.GetMINVectorPoint(VEC_C, CMPX_REAL_C, PosMin, ResultMin) = False Then  
    FEMTET.ShowLastError  
End If
```



```
'----- 最大値の取得 -----  
Dim PosMax() As Double '最大値の座標  
Dim ResultMax As Double '最大値  
  
If Gogh.Watt.GetMAXPotentialPoint(CMPX_REAL_C, PosMax, ResultMax) = False Then  
    FEMTET.ShowLastError  
End If  
  
'----- 最小値の取得 -----  
Dim PosMin() As Double '最小値の座標  
Dim ResultMin As Double '最小値  
  
If Gogh.Watt.GetMINPotentialPoint(CMPX_REAL_C, PosMin, ResultMin) = False Then  
    FEMTET.ShowLastError  
End If
```

温度の最大値、最小値は、Watt.GetMAXPotentialPoint()、Watt.GetMINPotentialPoint()で取得できます。

8-3. 指定座標の温度を取得するコードに変更する

次に任意の座標の温度を取得します。

```
'----- 任意座標の計算結果の取得 -----  
Dim Value() As New CComplex  
If Gogh.Galileo.GetVectorAtPoint(0, 0, 0, Value()) = False Then  
    FEMTET.ShowLastError  
End If
```



```
'----- 任意座標の計算結果の取得 -----  
Dim Value As New CComplex  
If Gogh.Watt.GetPotentialAtPoint(0, 0, 10, Value) = False Then  
    FEMTET.ShowLastError  
End If
```

```
Cells(11, 1) = Value(0).Real  
Cells(12, 1) = Value(1).Real  
Cells(13, 1) = Value(2).Real
```



```
Cells(11, 1) = Value.Real
```

任意の座標の温度の結果は、Watt.GetPotentialAtPoint() で取得できます。
戻り値は配列から変数に変更、取り出す座標を0,0,10に変更します。
結果をセルに表示する処理も上記のように変更します。

8-4. 結果抽出までマクロ実行する

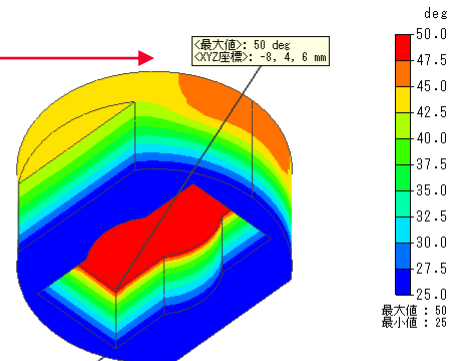
'----- 解析結果の抽出 -----
'<<<<<<< 計算結果を抽出する場合
'SamplingResult



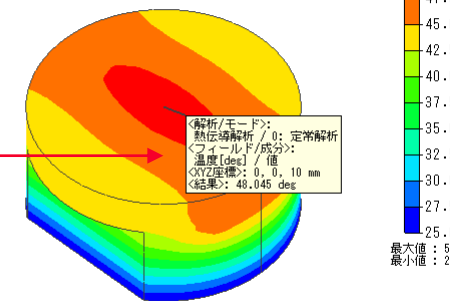
'----- 解析結果の抽出 -----
'<<<<<<< 計算結果を抽出
'SamplingResult

	A
1	50
2	-8
3	4
4	6
5	
6	25
7	-9.1627
8	4.00563
9	0
10	
11	48.0454
12	

Powered by Femtet
<https://www.muratasoftware.com/>



ソルバ : 熱伝導解析
モード : 0: 定常解析
フィールド: 温度[deg]
スケール : Linear
全体寸法 : 20 mm



ソルバ : 熱伝導解析
モード : 0: 定常解析
フィールド: 温度[deg]
スケール : Linear
全体寸法 : 20 mm

編集対象	編集のコツ
データベース設定	GUIでの設定内容とコードを見比べることで編集ポイントを特定する
モデル作成	履歴（ヒストリー）とコードを見比べることで編集ポイントを特定する
結果取得	サンプルコードを編集する マクロヘルプのサンプルコードを参考にする 不明点はユーザーサポートに問い合わせる
一般的なVBAの記述方法	Web検索すると様々な記述例を知ることができるのでそれらを参考にする。

VBAの文法とサンプルマクロのご紹介

For文は同じ処理を繰り返したい場合に使用します。

【For文】

```
Dim i As Integer
For i = 0 To 2
    MsgBox "iの値は" & i
Next i
```

【For文】 iを2つつ増やす

```
Dim i As Integer
For i = 0 To 4 Step 2
    MsgBox "iの値は" & i
Next i
```

【For文の書式】

基本的な書式は“For 変数 = A To B 処理 Next 変数”となります。

変数がAからBになるまで処理を実行し続けます。

例えば←のコードだと、iの値が2になるまでiの値をメッセージ表示します。

この書式の場合、変数の値は1つつ増えていきます。

変数の値の増やし方を変えたい場合、

“For 変数 = A To B **Step C** 処理 Next 変数”と記述します。

この書式の場合、変数の値はCつつ増えていきます。

Do～While文は、条件を満たす間、同じ処理を繰り返したい場合に使用します。

【Do～While文】

```
Dim i As Integer
i = 0
Do While i < 5
    MsgBox "iの値は" & i
    i = i + 1
Loop
```

【Do～While文の書式】

基本的な書式は“Do While 条件 処理 Loop”となります。

条件を満たす間、処理を実行し続けます。

例えば←のコードだと、iの値が5未満の間、iの値をメッセージ表示します。

※For文やDo～While文などの繰り返し処理を実行するコードは、書き方を間違えて常に条件を満たすような処理にしまうと、無限ループを起こしてしまうので気を付けましょう。

ムラタソフトウェアのウェブサイト上にExcelで動作可能なサンプルマクロを多数公開しています。サンプルマクロのコードを編集してカスタマイズする事も可能なので是非ご参照ください。

<https://www.muratasoftware.com/support/macro/>

事例33: ボディ毎の最大値と最小値を取得

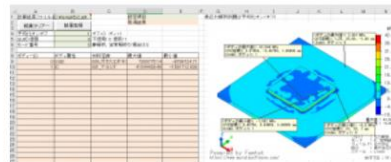
学べるテクニック

ボディ毎の最大値と最小値を取得するマクロです。

全ボディ（単一モード指定）または全モード（単一ボディ指定）での結果取得に対応しています。
熱伝導解析の温度、電場解析の電界ベクトルの大きさ、応力解析の最大主応力の3つの結果取得に対応しています。

他の節点結果の最大値、最小値を取得する場合は標準モジュールのSetResultField関数、SetResultMode関数、GetResultNode関数を編集することで機能変更追加が可能です。

例題イメージ



Download

—おわり—